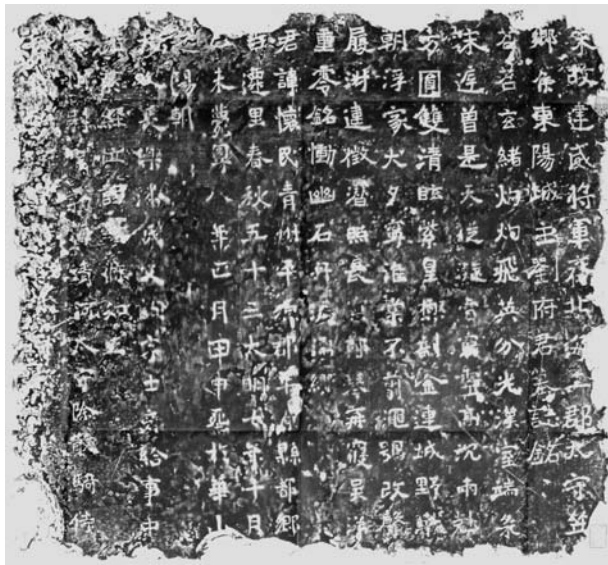




劉懷民墓誌銘

大明八年(464)
(南朝・宋時代)



図版③

歴代墓誌銘にみる
書法の変遷⑤

木 雞

木 雞 室

伊 藤 滋

東晋の後、北方に異民族の北魏王朝が成立し、南北に二分される。「劉懷民墓誌銘」は、南朝の宋時代の数少ない刻石です。清末に発見され、戦前までは所在が確認されていなかったのですが、現在は所在不明です。拓本で見ると、限られた部分に破損が見られますが、保存のいい上部からこの墓誌銘の独特の書風を窺うことができます。先人は、北魏の「中嶽嵩高靈廟碑」(465年)や「爨寶子碑」(405年)に似た書風であると述べています。比較図版②を見てください。方形の堅い筆画の文字ややや右肩上がりの動きある書風などは中嶽嵩高靈廟碑によく似ています。しかし筆画の太い細い抑揚などは、中嶽嵩高靈廟碑などよりも滑らかで実に重厚な趣を示しています。全体にいろいろな書風に通じる要素を備えた見事な楷書ではないでしょうか。次号は南朝・齊時代の「劉岱墓誌銘」です。

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りいただければ幸いです。

伊藤 滋 メールアドレス

mokkei@galaxy.ocn.ne.jp



書道芸術院

平成の群像 (2011)



小伏小扇

私と金文

一文字を素材に書作するとき、選ぶ文字は重要な役割を果します。私は心に一番響いた事柄から文字選択をするのが常です。実母を亡くした年にこの作品が生まれました。私共のグループは二十数年前から甲骨を素材にと決め同時に彫ることを始めました。さて手順として、まずその文字の成り立ちを「漢字の起源」(加藤常賢著、角川書店刊)から捜してみます。

「字形Ⅱ女に両乳房のある象形文字で

ある。字音Ⅱ「ボウ」である。この音は「哺」(はぐくむ)の意から来ている。字義Ⅱ乳で子を哺む女の意である」と。次に「甲骨金文辞典」(水上静夫著、雄山閣刊)をみて「字形Ⅱ象形。跪ずいている女性の胸の双方に乳房のある形に象る。字音Ⅱ「ボウ・ポ」①はぐくむ、やしなう。②子を生む。子を生み育てる意を示す。字義Ⅱ①乳で子を哺む女。②子どもを生み育てる女。ともに、はは。参考Ⅱ「女」と「母」字の字形の相違は、この乳房があるか否かである。楷書体でも同じ。」

字体については、甲骨、金文、石鼓、鄂君啓節、篆文、古璽、陶文、楚帛書の一字ずつに目を通します。この時、頭の中では金文と決まってきましたが、念のため、ここでコピーをとっておきます。その後、「字通」(白川静著、平凡社刊)をみます。東京学派と京都学派で研究内容が異なる場合があります。その点をよく注意しなければなりません。

ここから自己のイメージをふくらませていきます。縮小サイズに何通りもの原稿を書きます。原稿が出来上がれば、筆を決め、墨色を決め、用紙を決め、大きさと強さの同一感を内に秘めた表現にしたいと念じながら書き込みます。天候によって墨色が異なりますから、天候のいい日に書きます。この頃は自作の印を最後に押します。一作ごとに印を自作していこうと欲ばっています。



第53回毎日書道展出品

書のひろば

理事長 辻元大雲

毎日新春展・朝日20人展等開催

新春恒例の書展として毎日新聞社・毎日書道会主催の「現代の書 新春展」が東京銀座和光と東京セントラル美術館の二会場で1月5日より10日まで開催され、松坂屋別館カトレアサロンの毎日チャリティ書展や銀座かねまつ画廊での「有野珍扇展」など、銀座通りは書で溢れかえる盛況を見せた。

和光会場では本院恩地春洋会長が「鶴」辻元大雲が「片山由美子句」をそれぞれ発表、セントラル会場は60歳以下100名、うち院関係は種谷萬城・半田藤扇・下谷洋子・尾形澄神・前田龍雲・工藤永翠・嵯峨大拙・千葉蒼玄の8名で、中堅若手として大いに気を吐いた。会期中には和光でのギャラリートーク、セントラルでは席上揮毫が連日行われ、満員の盛況で関心の高さを見せた。

この新春展も10回目を迎え、ほぼ定着の感があるが問題点がないわけではない。和光会場でのメンバー固定によるマンネリと閉塞感、セントラル会場は60歳で区切るメンバー選考のアンバランス。60歳以上の審査会員約600名に対し、60歳以下は約200名、それぞれよ

り100名を選抜することから圧倒的に60歳以上が厳しい選考となる。60歳以下の中堅・若手に機会を多く与え将来の活力を養い育てる意味も大きいだろう。新春ということで干支をシンボルに展開してきた10年、やがてあと2年で十二支一回りする。二会場の展覧会運営の根本的な見直しも必要となってくると思われる。



新春展会場にて 恩地会長とともに

上野の朝日20人展はさすが伝統と技術の確かさに裏付けられたレベルの高い書展として位置づけられている。毎年拝見しているがややマンネリ観もたれよう。毎回の作品を拝見して20人のメンバーの本展にかける情熱と真摯な

姿勢には敬服する。少しずつメンバーが入れ替わり、本年は55回記念展として俊英五人展を企画するなどいろいろ改革もされていることは感じつつも、やはりメンバーが日展に偏りすぎている感がある。新しい、時代に対応する書の在り方を求める大胆な試みはできないだろうか。犬の遠吠えと無駄を承知しながらの感懐である。

毎日関西代表作家展開催

新春恒例の書展としてもう一つ。毎日関西展所属作家による代表作展展が、大阪天王寺の近鉄デパートにて1月13日より開催された。併催として東大寺前管長清水光照師の書画などが特別展示され、独特の滋味あふれる書や絵画、焼き物などが多くの観客を魅了した。

13日には出品者による祝賀会も催され盛会であった。本展には毎日書道会の顧問、理事・監事も賛助出品し、更に干支文字によるハガキコンクールが小中高生約500点の応募から約100点が入選し会場に展示され賑やかであった。本院からは恩地春洋会長はじめ関西展所属の会友以上多数が出品協力した。

現代女流書100人展

例年渋谷の東急デパートで開催されてきたが、本年より日本橋高島屋に会場を移転して行われることになった。書道芸術院展と会期が重なり、皆様の

ご高覧をお願いしたい。
・会期 2月1日～7日
・本院関係出品者
最首翠風・山藤美知子・下谷洋子・飯高和子・金木和子・熊谷宗苑・砂本杏花・飯田春香・小林琴水・太田蓮紅・真下京子・三森憲香
・席上揮毫 2月3日～6日まで連日5名、午後2時から会場にて。
2月6日には本院飯高和子、下谷洋子お二人が揮毫予定。

2011年ドイツ・ウィーンスバーデン市「文字芸術展」開催

10年ほど前にドイツフランクフルトの大学芸術学部教授クレール博士と亡き金子卓義氏、さらに寺田健一前毎日書道会専務理事との協議により企画が持ち上がり、毎日理事会でも承認されこのほど実現することになった。

・主催 ドイツ 文字アート財団
・名誉主席 ドイツ連邦ヴァルフ大統領
・協力 毎日書道会・中国書法家協会
・参加国 日本、中国、韓国、ヨーロッパ(独・仏・スイス・スペイン)、アラブ諸国(イラク・イラン・レバノン)
・日本側出品者 20名(主催者推薦)

石飛博光、内山玲子、辻元大雲、仲川恭司、中野北溟、船本芳雲ほか
・会期 4月29日～6月11日
・会場 ヴィーンスバーデン市
・ドイツ展の後ヨーロッパ巡回予定

漢字 (五)

名越 蒼竹

現代とスピード感

少なくとも現代性を感じさせる要素一つはスピード感ではないか。書においても作品の中にスピード感を盛り込むことは一つのあり方だと思われる。ただスピード感とスピードそのものとは異なる。ただ運筆を速めればよいというものではないだろう。私はスピード感を表現する要素として直線の生かし方があるのではないかと考えている。

書においては特に漢字にこのことが活かせると思ひ、曲と直の組み合わせを意識していた時期がある。篆書では小篆や金文より甲骨文のほうが成立年代とは逆に現代のかもしれない。行草作品では曲線が多くなりがちではあるが、敢えて極端な直線を加えてみることで、雰囲気や現代的に見せられるかもしれない。

その意味では「意」を前面に出して制作に当たっていた時期がある。掲載の作品はそのころの二作である。



第56回書道芸術院展出品作

名越蒼竹書



第27回鳥取県書道連合会展出品作

名越蒼竹書

21世紀の書

—私の主張—

前衛書 (五)

工藤 永翠

ここ数年、展覧会作品には星座のタイトルをつけ、イメージを膨らませて制作している。広大な宇宙空間に煌々として太古から輝きを放つ星々の存在は、私に様々なロマンを抱かせてくれる。

冬の夜空に輝くシリウスは孤高の輝きを、夏の夜空に輝くマルス(火星)は情熱の赤を、また星座は物語を。しかしそれを書の線で表現するということが自體、困難極まりない。それを乗り越えた時、私の表現の幅が広がり心の奥底にある思いを表現する一つの手段となると信じている。

平成21年、毎日書道展前衛書

部において栄えある会員賞を受賞できたことは私にとって青天の霹靂であった。

展覧会に出品するようになると、否応なく同時に2作品3作品を作ることになる。毎日展出品の時期、奇しくも別の展覧会に向け必死に制作をしていた。結果は時として対照的な面を見せる。受賞作「レチクル」は別の展覧会制作の合間に何も考えず無心で気の赴くままに書いたものだ。ある意味(1)で書いた「無念無想」の精神で書いたものだった。案の定、雑念一杯で書いたものは落選、制作の合間に書いたものは会員賞と喜びと悔しさが同時に訪れた年であった。

年月が過ぎ、すっかり初心を忘れていた私に20年を経て改めて「無心」の大切さを思い起こさせてくれた受賞、若かりし頃、屋上から夜空を眺めて夢を膨らませていたころの熱い思いがまた蘇ってきた。初心忘るべからずである。



レチクル

工藤永翠書

第61回毎日書道展会員賞受賞作

現代の書 新春展

今いきづく墨の華

(2011)

主催：毎日新聞社・(財)毎日書道会

和光ホール30人展 2011年1月5日(水)～10日(月・祝) 銀座・和光本館6階

セントラル美術館 2011年1月5日(水)～10日(月・祝) 東京セントラル美術館

〈和光ホール30人展〉

「風すでに」片山由美子

辻元大雲



千支文字

134×134cm



「鶴」

恩地春洋



千支文字

99×69.5cm



〈セントラル美術館会場100人展〉

千支文字



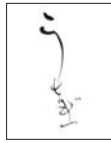
「黙示録」



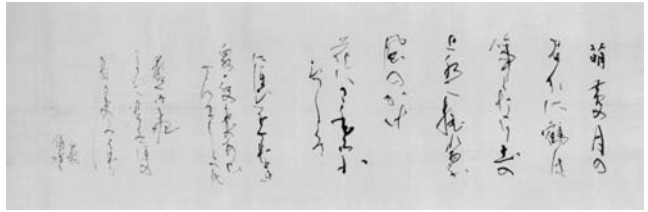
千葉蒼玄

242×91cm

千支文字



下谷洋子



「泉石」北原白秋

60.5×184cm

千支文字



「心画」



嵯峨大拙

180×120cm

千支文字



「感恵徇知」孫過庭「書譜」



種谷萬城

138×139cm

特集：現代の書 新春展

千支文字



「初空」本宮珠江

尾形澄神



235×91.5cm

千支文字



前田龍雲



「鳳」

105×135cm

千支文字



「アンドロメダ」

工藤永翠



242×91cm

千支文字



「七言一句」

半田藤扇



232×83cm

貫名菘翁の書に接して

服部 香燕

(漢字部・審査会員)

書を始めて古典を学ぶ大切さを知りました。その過程で貫名菘翁の「山田公雪兔碑」に惹かれました。この碑は奈良県桜井市の「特別史跡・山田寺」にあります。この地は、私が生まれ、育ち、現在も生活する明日香村に隣接しています。書を学ぶまでは、単に「山田寺」という寺名としてしか受けとめていませんでした。が、「山田公雪兔碑」を臨書することにより、私の中で俄に特別な重みのある場所として受けとめるようになりました。ここは昔の飛鳥の宮都に向かって緩やかにカーブしている所に位置しています。この場所は、毎日のように通っている道からわずかに数メートル入った所にあります。周囲は今なお閑散とし、広くて美しい山裾の田園に囲まれた緑いっぱい

の所です。碑は保存の為に頑丈な鉄柵に囲まれています。碑文は、明確に見えることができますが写真を撮るには柵が災いしてうまく写すことは難しいです。それ故何度となく訪れています

その度に新たな発見があり惹かれています。

菘翁は正しい伝統を把握することに努め、古典や真跡を重んじ臨模して、徹底的に学んでいることを窺い知ることができ、改めて古典の臨書の大切さを思い、基本であることをひしひしと受けとめています。山田寺から更に南へ行くと飛鳥資料館があり、そこには



鉄柵に保護された「山田公雪兔碑」

「雪兔の碑」部分



山田寺の、東面回廊の復元や、「山田寺」と書かれた墨書土器や、日本最古級の大型木簡等、寺ゆかりの出土品を沢山見ることが出来ます。それらのものに触れて、その時代の空気を肌



山田寺跡とその全景と周囲の風景

で感じとりたい。そうすることで臨書にも深みが増えたと信じて足しげく通っています。良き環境の中に身を置いていく幸せをありがたく思い、いつの日かこのような文字に少しでも近づけることを目標として日々精進を重ねていきたいと思います。

初心に返って

中 瀬 美 知 子

(前衛書部・審査会員)

今年、4年に一度のオリンピックの年です。私は、オリンピックの年になると思い出すことがあります。私が小学校5年生になったとき、アジアで初の東京オリンピックが開かれました。それにちなんで、小学校では「走れ聖火」という文字を筆で書きました。それを当時の担任の先生が富山県少年美術展に出品してくださったところ、入賞することができたのです。それまでの私は引込み思案で、写生大会や書初大会などで一度も賞をいただいたことはなかったのですが、なぜかそれがきっかけとなり、少しずつ人前でも自分の思いを語れるようになりました。

また、私が書道始めたのもそのころで、その時以来ずっと浜谷芳仙先生にご指導を仰いでいます。しかし、本格的に書道が続けてみようと思ったのは、大学へ行ってからのことです。幸いにも地元の大学であったため、浜谷先生の書道塾へ通うことが可能であっ

たこと、また浜谷先生は私の目指していた小学校教師の大先輩であったことなどから、何の迷いもなく、いつしか先生をもう一人の父親のように慕い、毎週練習に通っていました。そのころ、前衛書道に出会いました。そして、展覧会が近くなると、書道舎



180×180cm

「幽」第47回書道舎展選抜大作出品

の研修会で、今は亡き深松海月先生や中島水先生の指導を仰ぐことができました。まだ前衛書をやり始めたばかりで何が何やら分からず書いている私の拙い書を見て、「素朴でいいね」とか「無欲のおもしろさがある」と言われて褒めてくださいました。でも、私は、「何がどうよいのだろう」「きつとお世辞だ」などと、あまり喜ばずにいたのを覚えています。

今、私は浜谷先生と同じ教職の道に進んで、毎日子供と接しています。書写の時間になると、どの子供の書いたものもあどけなさや素朴さを感じます。ほかの教科の時間には、「もっとこうしなさい」「まだまだできるはず」と叱咤激励の繰り返しで、うるさい先生と思われているようですが、なぜか書写の時間だけはそういった気持ちにおおわれず、どれを見てもし子供らしい稚拙美を感じます。きっと、私が若いころ深松先生や中島先生が褒めてくださった言葉も、無の境地で筆を運んでいた私の姿の中に、今私が子供の書を見るときに感じる思いをいただいていたからではないでしょうか。

それから約30年余りの年月が過ぎた今、自分はどれだけ成長したのだろうかかと迷い、「もっとこうしたいのにな」自分の力をしっかり見つめる目が備わったからでしょうか。そして自分の書に対する甘さを認識することができるようになったからでしょうか。こんな私

にも、おかげ様で審査会員という身に余るご推挙をいただいたことに感謝し、今の自分から逃げないで初心に戻り、無欲で挑戦し、今後とも一層精進していきたいと考えております。

おわりになりましたが、私をこれまで支えてくださった浜谷先生をはじめ、多くの仲間の皆様にお礼を申し上げます。

尚、審査会員としての自覚に立って、院の活動に協力したいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

墨仙会幹部懇親会が楽しみ



(中央・浜谷芳仙先生)

漢字研究部

曹全碑(漢)②

用紙 半紙普通判

左の法帖の中から何文字臨書してもよい。(掲載部分以外は不可)

特別研究部臨書課題

Ⅱ(全紙以内・縦横自由) 左記の掲載以外も可

〔解説〕曹全碑は、胴体を一段とひきしめて書かれており、

それが破磔はたを持つ主画をいっそう長く見せている。字形はかなり扁平で、横画に対してたて画が短い。たて画の終筆は鋭い懸針けんしんとたつぷりとした垂露すいろうの両方を活用している。

時に、たて長な字形を混じえたり、線を重厚にするなど、平凡にならない工夫がされている。

〔注〕懸針…たてに引く画の終筆を払い、針のように鋭く尖らす運筆法。

〔注〕垂露…たてに引く画の終わりを払わずに、筆を押さえて止める運筆法。

慕二史魚。歴郡右

職上計掾史。仍

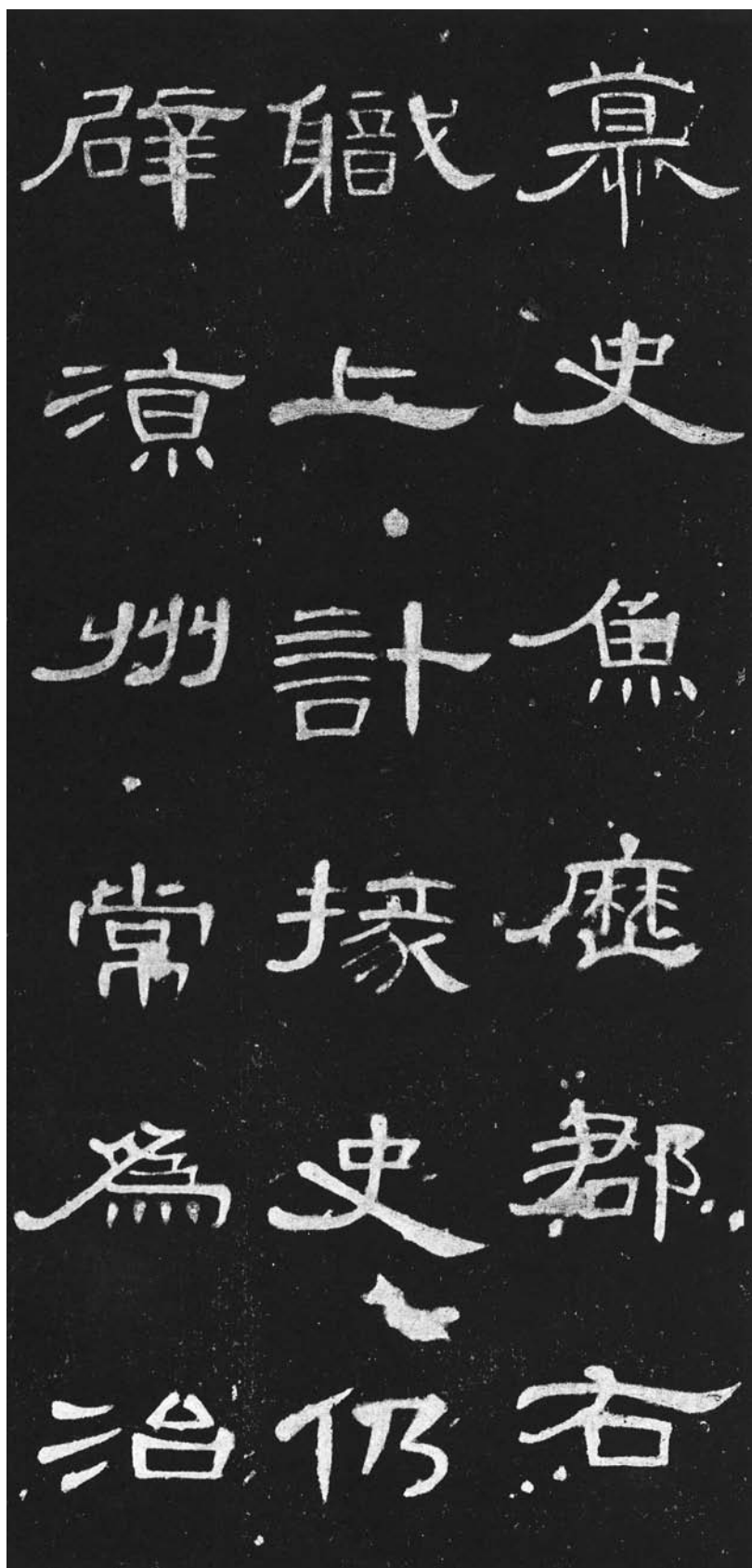
辟涼州。常爲治

※落款を必ず入れる

署名、もしくは

〇〇臨

(押印のみ可)



特別研究部臨書課題

（全紙以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

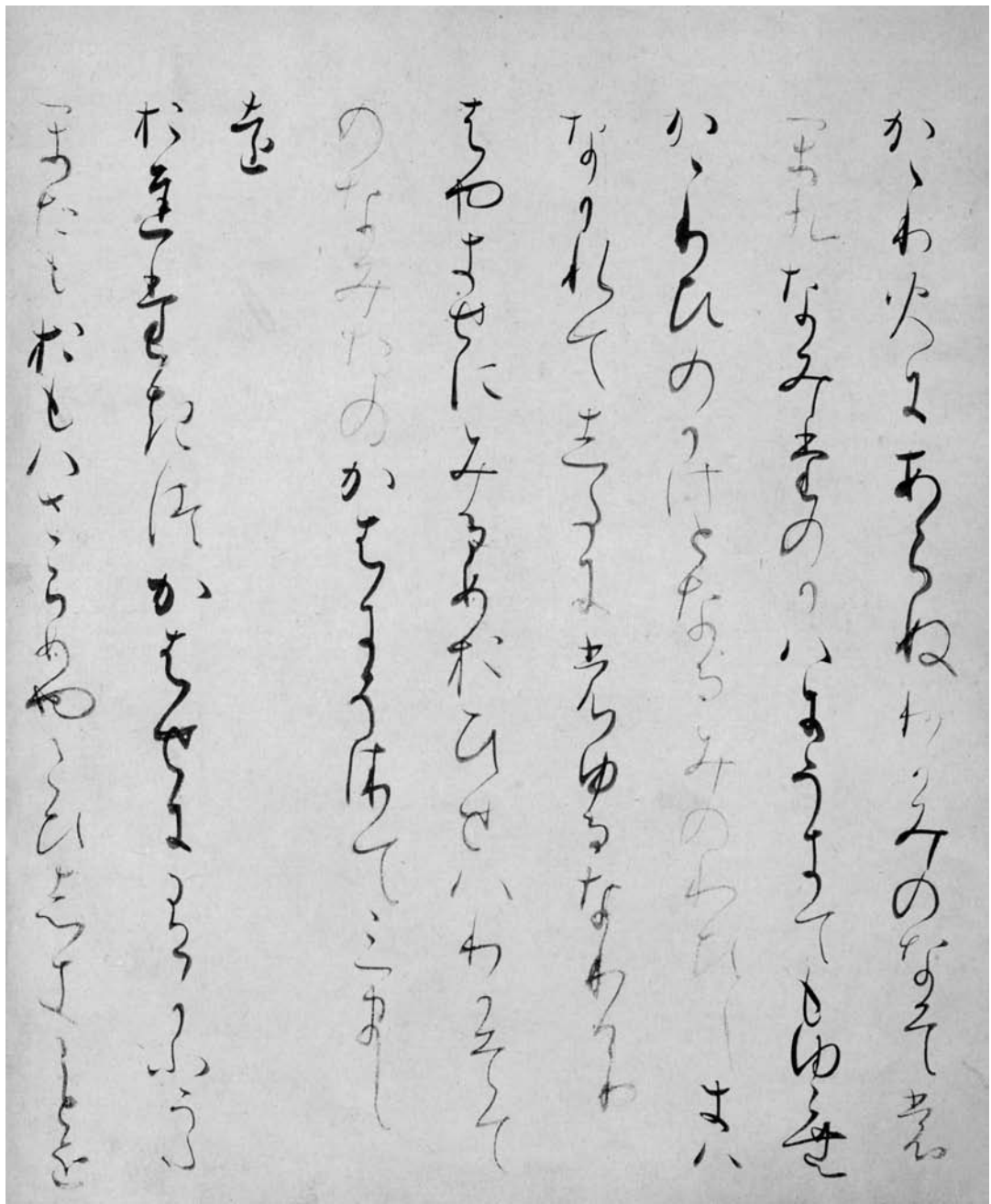
用紙 半紙普通判（料紙可）

注 かな研究部競書作品は、

上の古筆の掲載部分より

歌一首以上を書く。

（全臨可）



〈よみ〉

かざり火にあらぬわがみのなぞも
かくなみだのかはにうきてもゆらむ
かざりびのかげとなるみのわびしきは
ながれてしたにもゆるなりけり
はやきせにみるめおひせばわがそで
のなみだのかはにうゑてみまし

おちたぎつかはせにうかぶうた
かたもおもはざらめやこひしきことを

〈解説〉

関戸本古今集の構成を見ると、料紙の色に合わせながら、例えば漢字の取り扱い方に主題の中心を置く・行の流れや行間の動きに重点を置く・運筆の速度が速く、筆圧の変化のほげしいところ・字粒が小さくデリケートな運筆の部分・秃筆による線の太い大胆な掠れの所など、多様なメリハリの利いた構成表現がされている。これは、筆者のその時々々の感興によるものと思われる。

注 秃筆とは、筆尖が擦り切れてしまった筆。

漢字規定 初段以上 【三月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

最首翠風選書

止明

翠風書

水鏡

明鏡止水 よみ(明鏡止水)

書体||自由

習い方解説 (五)

最首翠風

明鏡止水

「今の心境は?」「明鏡止水だよ」と言う政治家の会話を聞いたことがありますね。言葉の意味をイメージして無心に書いてみました。私にとって身についている楷書の古典は虞世南の「孔子廟堂碑」です。温かさや気品があり「癒し系」の絶品だと思います。

副作品は墨量を工夫して潤濁を意識したもの。楷書も、摩崖碑や造像など魅力溢れる古典を思い出してください。



漢字規定 秀級以下 【三月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

小林琴水選書



道法自然

よみ (道は自然に法とる)

書体Ⅱ楷書

習い方解説 (五)

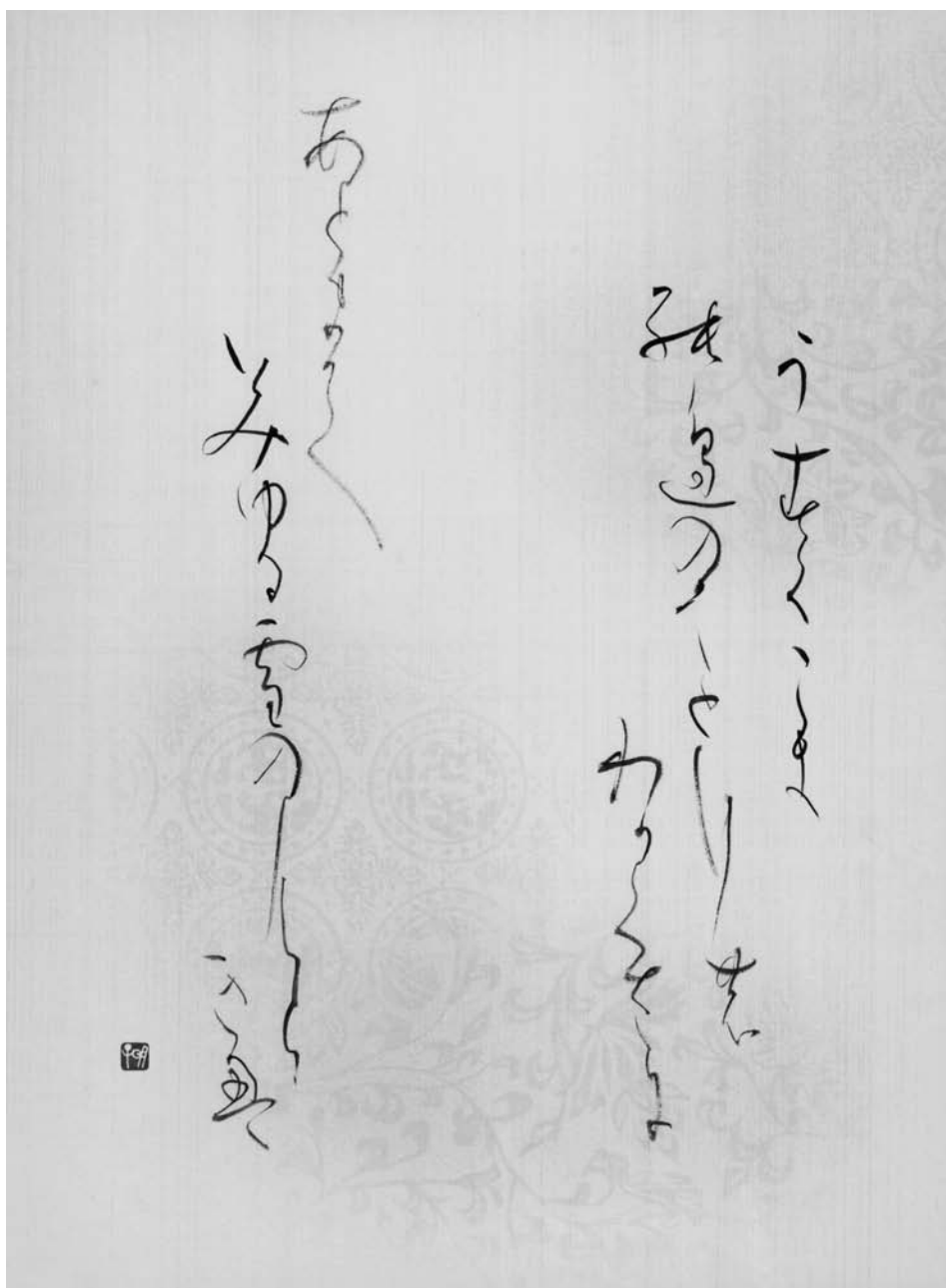
小林琴水

道法自然

今回は点画が多いです。点是非常にむつかしく、重くなりがちです。筆の弾力を生かして生きた点を打ちましょう。線も点のあつまりです。筆をポンと置くだけでは駄目です。どんなに小さな点でも筆の先を使って動かすのです。点画だけの研究も必要です。是非追求して、色々な点を研究して下さい。

かな規定 初段以上 【三月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

石井明子選書



習い方解説 (五)

石井明子

薄く濃き野への緑の若草にあと
まで見ゆる雪のむら消え
(宮内卿)

● 創作の仕方

好きな題材を選び、十分な鑑賞の後、筆をとって下さい。古筆を学ぶとき、じっくり眺め、味わってから書きましたね。創作は決して、勝手に書いてよいということではありません。学んできた決まりごとを手練り、美しさを目指して下さい。

最初は、手本を真似て下さい。その形が手に入ったら、他の題材を同じ形に嵌め込んでみます。結果、一つのパターンは自分のものになります。経験と美意識により、この字はこの場所に合わないとか、この字は伸ばすべきとかが解ってきます。そうしなければしたもの、歌意は、野辺の緑の濃い薄いによって、雪が速く消えたか遅くまで残っていたかわかることだ。

よみ方 うす(巻)く(き)ま(文)の(能)べ(辺)のみ(三)どりの(農)わか(可)く(さ)に(尔)

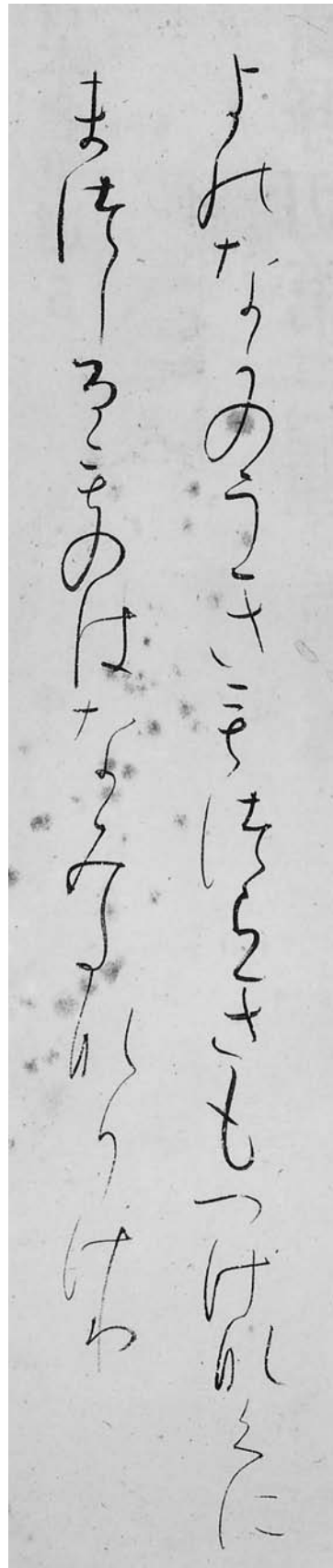
あとま(末)で(三)み(美)ゆる(雪)のむ(无)ら(ぎ)え(盈)

創作

かな規定 秀級以下 【三月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1/2 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方 よの(能)なか(可)のうきも(毛)つ(徒)らきもつげな(那)く(久)に

まづ(徒)しるも(毛)のはなみだ(多)な(那)りけり(利)

習い方解説 (二)

木村東舟

溪の首ちかく澄みみて春の夜の明けやらぬ庭にうぐひすの啼く
(若山牧水)

半折横に書く短歌一首は、一行に書ける文字が三・四字ですので「行の振幅」は出し難いです。

時々短い行を添える仕事をします。一・二文字を長い行に寄り添わせ作品を大きく膨らませてみましょう。漢字、かな、変体仮名を上手に組み合わせ、中央を大きくし、行間も広めにとります。奥行きのある作品を書いて下さい。

かな条幅規定 【三月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

木村東舟選書



よみ方

た(多)に(二)この音ち(運)か(可)く(久)すみ(三)るて春のよ(与)の(能)あ(阿)け(遣)やらぬ庭に(二)うぐ(久)ひ(目)す(寸)のな(那)く(久)

創作

出品券

貼付位置

*よこ形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【三月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

西林乘宣選書



若生^{もしも}世界^ニ妙樂自在之處^ニ若^シ有^ル苦^シ累^ニ即^チ令^テ解^ト脱^ス
(若し世界に生まれなば妙樂自在の処に若し苦累有らば即ち解脱して)

書体||自由

漢字条幅規定 秀級以下 【三月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

辻元大雲選書



山近朔風吹積雪 天寒落日淡孤村
(山近く朔風積雪を吹き 天寒く落日孤村に淡たり)

書体||自由

習い方解説 (五)

西林 乘 宣

草書。牛橛造像記(北魏・太和19年)の一節を採り上げました。個々の字に何通りかのくずし方がある。それを全体のバランスを考えながら使い分ける。これが力量の問われるところ。今回は、単体にして省略形かつ太目に構成してみました。私としてもこういうのは初めての試みです。あわせて原典も勉強してみてください。

習い方解説 (五)

辻元 大 雲

今回は七言二句十四文字、二行書の定番といえます。一行目八字、二行目六字でも七字ずつでもよいと思います。やや大小、潤渴の變化をつけてみました。更に連綿や、書体をかえて楷書や隷書など色々工夫できます。

用具の工夫も、筆をかえる、墨色を工夫してみるなどやり出したらきりがありません。

習い方解説 (五)

節分とは、季節の移り変わる時の
意味で、冬と春の分岐点。この日の夜、
寺社では、春を迎える意味で追儺
(ついな)が行なわれる。

節分や鬼もくすしも草の戸に
虚子句 春壽かく

「書は皆な身の軽きを以って尚しとなす」(劉熙載『書概』)ここで言う「身が軽い」というのは、踊っているような字形を言うのでなく、筆鋒⇨ペン先きの働き(動き)を指しているのである。ペン先きが、ただ単に、紙上を滑っていくのでなく、前にも書いたが紙を切るような働きが要るのである。とぎすまされた軽快さが筆跡を美しくみせる。又「身を軽く」とは細い線で書くことでもないことも確かである。

※落款を必ず入れる。

(自分の名前を入れること。)

ホー！作品 各部総評

NO. 596

ペン字部 師範 櫻田 龍貞

一字ずつ丁寧な楷書作。構成もよく落款まで気脈が通じ、温和な雰囲気品格の高さを醸し出す。
◎ペン字部総評 片仮名と漢字の調和作が多く、よかったが、行書は少々残念作があった。誤字に注意。(和楓評)

やぶこうじ科の常緑灌木で高さ六十センチ。夏、白い小さい五裂の花をつける。花の後、小さい丸い実をつける。
万両や 禪寺の色こゝに凝る
美作句 龍貞(わく) 也

漢字条幅部 師範 浪川 秋花

木簡帛書の風を得てリズムよく安定した作。運腕の動きが大きく広がりを感じさせる作です。
◎漢字条幅部総評 上級課題やや難しかったか、字数の関係からか低調。書体・書風など表現の工夫を更に追求してほしい。(大雲評)



現代詩文書部 特選 工藤 山房

線質、空間、全て美しい。佳い作品は観る側に向かを感じさせる。詩情のない作は無表情の顔と同じ。
◎現代詩文書部総評 言葉をただ並べるのでなく沸沸と詩想湧き出る作品がみたい。(素雪評)



かな条幅部 準師 斉藤 悦子

穏やかな墨色が形のよい字とマッチし、大胆な動きの作品に静けさを醸し出して、香り高い。

前衛書部 特選 鈴木 翠夢

重厚な中央の縦画に、両サイドの渴筆がうまく調和し、迫力のある作品にまとめている。
◎前衛書部総評 多様な作風で前進はみられるが、もっと書線を大切にしてほしい。(光昭評)



◎かな条幅部総評 どの漢字も誤字が多く残念。字典にはあっても平素多用されるものを使う方が無難。字粒再考されたし。(明子評)

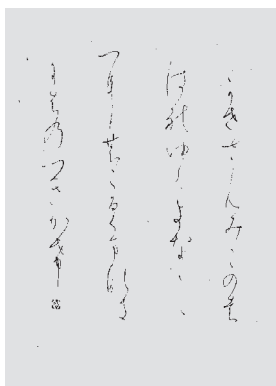
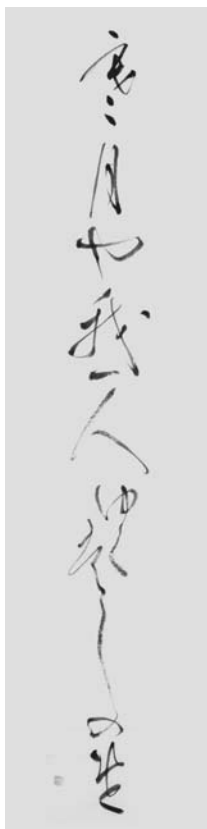
漢字部 師範 阿部 青沙

二本の筆を巧みに用い、変化多様な線質で、独創性に富む。確とした基礎力と豊かな感性を見る。
◎かな部総評 行草書と隷書が大半を占めました。何れの書体も古典学習を基礎にした創作が大事です。(萬城評)



かな部 師範 坂井 初江

しっかりとした転折が線に弾力を生み、リズムも自然。字の大きさ、墨色等も適格で、温かさを感じる。
◎かな部総評 庭にははです。指導者は特に注意！散らし書は、十分推敲して構成したい。字が小さく散漫なもの多く残念。(洋子評)



今月の

特別研究部優秀作品(特選)

前衛書 (秀水)

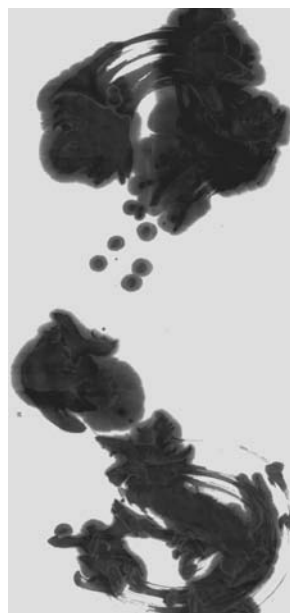
坂井初江

「嘆」



千葉華紅書

35×136cm



坂井初江書

112×53cm

現代詩文書

(蓮紅)

千葉華紅

「雪渡り」

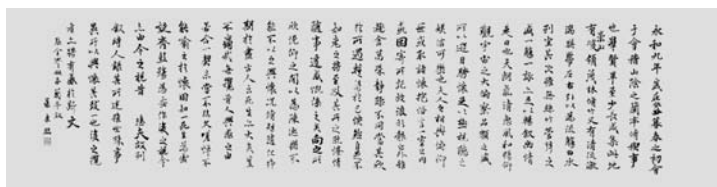
◆リズム感を上手に表現して見ている者の心に口ずさむ楽しさを感じさせてくれ終り静かさ絶妙な感。(倫子評)

◆美しい絵画に出会ったような感動を覚えました。こんなに叙情的な書は滅多に会えません。多謝。(明子評)

◆山馬の細筆を上手に使いややもするとうるさくなる線をよくまとめている。後半のまとめが少し固いか。(蒼玄評)

◆宮澤賢治の土俗性溢れる詩を象徴的に表現。余白を効果的に生かし、詩情を感じさせる秀作。(大雲評)

(大雲評)



西川藤象臨

35×137cm

臨書

(もくせい)

西川藤象

「張金界奴本蘭亭叙」

◆作者の手の内に入っている好きなおものであることが深く伝わる。真正面から丁寧に向き合って立派。(明子評)

◆細部まで行き届いた線ですっきりとした臨書に仕上がっている。字形を研究すれば更に厚みのある作となる。(蒼玄評)

◆張金界奴本の特徴をよくとらえ、細かな観察を丁寧に行った作。やや暢びやかさに欠ける点更に努力を。(大雲評)

◆筆先きを決かせてこの多字数をよく纏めてある。波法の流れに筆先きの返えりが甘い所が残念。(倫子評)

(倫子評)

◆柔らかな茶淡墨のにじみが豊かな広がりを感じさせ、暖かな気分になさせてくれる作。(大雲評)

◆体全体の動きを紙一杯に表現して次つぎと流れが出て来ている。墨色も筆の動きに変化されている。(倫子評)

◆墨の色の優しさに和む思いがする。題と異なる感じ方をしてしまったが、限りなく深遠な作品です。(明子評)

◆にじみが温さを感じさせ包み込まれるような優しさを表出する。強い線ではないがこれも一つの表現か。(蒼玄評)

漢字 (英峰) 久木田 直浩



168×51cm

久木田 直浩書

「石召詩」

◆達筆な書き方でよどみなく流れる。空間ものを射て白が確く。できれば素朴さもほしいがそれは別作か。
(蒼玄評)

◆筆先きの鋭さが速度に合せて表現され細字ながら体全体の動きを感じる。かすれの線に無理があるよう。
(倫子評)

◆漢字三行構成としてバランスよくまとまった作。範例を基としてのかかと思われるが一部点画に難あり。
(大雲評)

◆安定したリズム感のある巧みな作品です。引きしまった表現の行間、字間がスケールを大きくして佳。
(明子評)

創作の部(54点)
漢字 14点

かな 7点

現代 20点

篆刻 1点

前衛 12点

臨書の部(32点)
漢字 28点

かな 4点

総出品点数
86点

〈特選候補者〉

(創作)

漢字 玄穹 千葉 紅雪

恵雅 板橋 雅邦

大雲 長島 儂雨

かな 志引 鈴木 朝夫

現代 陽陽 岩崎 陽光

前衛 若葉 工藤 山房

山王 鈴木 春江

蓮紅 大友 紅春

(臨書)

漢字 翠柳 加藤 紫翠

蒼原 熊谷 青山

一弦 木村 貴衣

土気 白井 綾乃

かな 大雲 佐藤 希雲



60×182cm

かな (卯月)

前田 まさ美

「雲出でて」

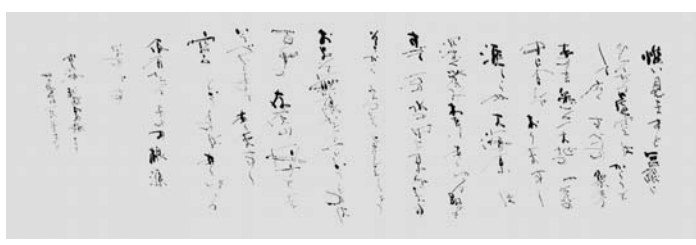
◆大きな呼吸で広がりある作。大胆な運筆が魅力だが全体構成と、下部の動きが不足。更に工夫を
(大雲評)

◆かなを体全体使って書く事は難しい事だと思いが、線の流れ、それを受ける次の線との受けが実に妙。
(倫子評)

◆気迫に満ちた濃密な作品です。上下の十分な余白が効果的で重さから救われている。どこか破れを。
(明子評)

◆力強くぐいぐいと書き進め強い線は草書の字形を見るようだ。側筆が多いが線に変化を持たせると広がる。
(蒼玄評)

前田 まさ美書



60×180cm

現代詩文書 (炎佳)

佐藤 華炎

「空海のことばより」

◆この詩を書く時にはすでに言葉が全身で理解されていてリズムある流れの表現に無理がない。
(倫子評)

◆空海の言葉を深く味わい、確かめるように文字にして、生まれ出た作品でしよう。細い線が美しい。
(明子評)

◆細線が語るように書かれ淡々とした中に墨の固まりが星のように点在する。あやうい字もあるがそれも味か。
(蒼玄評)

◆潤渾の変化と行のゆらぎがリズムを醸し、浮遊する心地を紙面に広げる。慣れすぎるのを戒めたい。
(大雲評)

佐藤 華炎書

漢字研究部
(蘭亭叙)

選評 大野 祥雲

今月のホープ作品



田中 一葉

漢字研究部 特選 田中 一葉

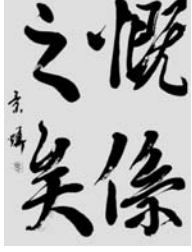
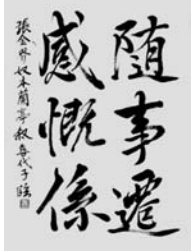
法帖の特徴をよく観察し、その美しさを確かな点画で処理した作品です。自然な流れから形成された字形、それを支える練度の高い線、白を生かした紙面へのまとめなど、冴えています。特に下の二字には光を感じます。

◎漢字研究部総評

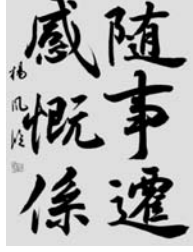
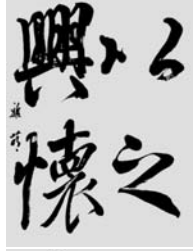
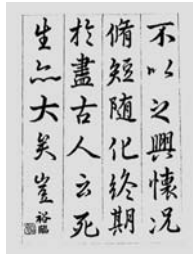
蘭亭叙は中学校の書写の教材にも採り上げられており、誰もが手にします。今回の皆さま

ん方の作品。よい呼吸で臨書されている方が多く、いい傾向だと思えました。なかには楷書的な作品、さらさら書いて線に深みのない作品もありました。

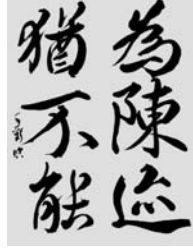
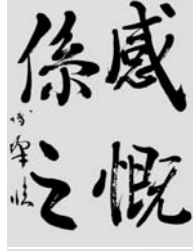
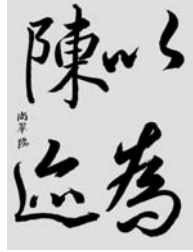
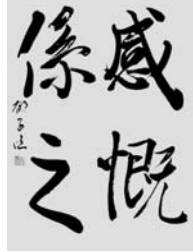
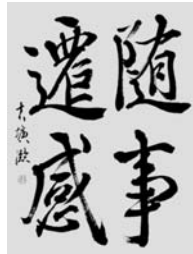
この教材は技法的には難しいですが、行書の基本を学ぶには最適です。用筆と字形、運筆の遅速、筆圧の強弱から生まれる多様な線質等々、書作に必要な要素も習得しましょう。



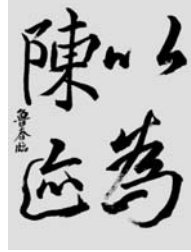
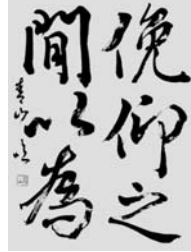
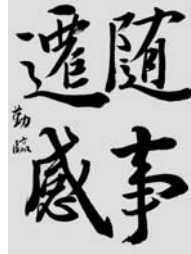
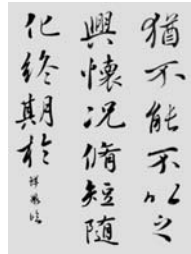
柏 啓子
喜 美子
知 子
景 子
谷 子
燁 子



井 瑞子
裕 兆
智 子
雅 子
楊 風



古 瑛子
郁 子
尚 子
博 子
千 彩

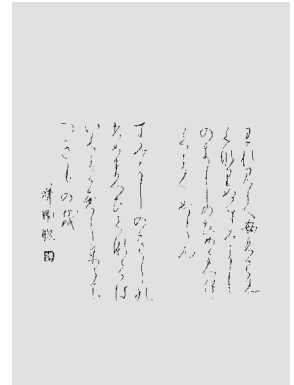


青 山
魯 子
玲 子
麗 子

かな研究部
(曼殊院本古今集)

選評 田村 澄子

今月のホープ作品



岩瀬 祥園

この古筆は優麗の趣致が豊かです。それをみごとに表現しました。墨量、墨色、美しく纏め秀作です。

◎かな研究部総評
今回も誤字が多く見られ、とても残念な作品もありました。読みながら正確に書くよう習慣にして下さい。それ以外は、線がよくまりました。

かな研究部 特選 岩瀬 祥園



良 蓉 東
泉 汀 子

彩 彩 正
雨 華 子

祥 昌 恵
峰 子 子

雅 与 愛
祢 子 石
泉 子

かな研究部成績表

彩正	洞書	卯月	高崎	千葉	秀	千正	う葉	澄春	東小	石智	秀水	玉松	湘I	竜泉	小藤	佐方	後藤	永瀬	岸田	吉山	平橋	高橋	小藤	酒井	酒井	高橋	明丸	石演	澄習	特選		
伊藤	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	伊藤	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	飯高	
敏英	幹楊	風泉	敏英	幹楊	風泉	敏英	幹楊	風泉	敏英	幹楊	風泉	敏英	幹楊	風泉	敏英	幹楊	風泉	敏英	幹楊	風泉	敏英	幹楊	風泉	敏英	幹楊	風泉	敏英	幹楊	風泉	敏英	幹楊	風泉
もく	佳	青木	啓子	禮紅	藤藤	律律	晴晴	悦悦	香香	時時	宏宏	遊遊	紀紀	初初	裕裕	桂桂	喜喜	惠惠	春春	優優	信信	星星	茂茂	茂茂	楠楠	春春	理理	燈燈	理理	燈燈		
高崎	入	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	
小込	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	山山	
遠外	176	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	名氏	